

表紙, 目次, 抄録, 雑録, 漫録, 雑報

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/41658

明治三十年三月十日發行

〔非賣品〕

十全會會誌

第 貳 號

第四高等學校十全會

●十全會々誌第貳號目次

誄辭

◎原著及實驗

- 擇捉免拉爾義ノ實驗 會員 高橋剛吉
- 虎列拉血清療法ニ就テ 會員 野田忠廣
- 輪癩及ヒ頸癩ノ療法ニ就テ 會員 岡部忠
- 瘰癧性脊髓麻痺ノ一實驗 會員 岡部忠
- 妊娠ニ兼ヌル卵巢囊腫ノ實驗 會員 河合

- 謀殺未遂犯鑑定實驗(モルヒ子中毒) 全會員 藤岡精治
- 實扶的里血清療法小實驗 會會員 澤田定信
- 膀胱結石検査法(表付) 會會員 岡村孝藏
- 三省錄 會會員 岡本太郎

◎抄錄

- 實扶的里血清ノ中毒實例
- 貧血及萎黃病ニ脾臟摘除ノ應用
- 疼痛點ノ壓迫ヲ以テ坐骨神經痛ヲ治療シタル成績
- 腦梅毒ノ治療法ニ就テ
- 下劑トシテ「いひちれーる」
- 歌斯の里性喉頭運動障害ニ就テ
- 歌私的里性失音ノ治療法 以上 會員 鈴木生
- 先天性葡萄膜炎外ノ一例

◎雜錄

- 固視野外ニ現ハルハ複視ニ就テ 以上會員 星野正齊
- 血筒ヨリ糖尿ヲ診斷スル法 以上會員 星野正齊
- 角膜及結膜ニ多發セル新生物ニ就テ
- 正規分娩ニ依ル兒麻酔ノ應用
- 子宮内膜炎ノ蒸氣療法 以上會員 岡本京太郎

◎漫錄

- 磷酸容量の定量法ニ就テ 會員 佐藤捨三郎
- 鈴木醫學士ノ書牘

◎悼歌 二首

- 杏林笑話 會員 A
- 鐵腸漫錄 會員 B
- 春を遊ぶ 會員 C
- 消閑漫語 會員 廣野霜生

◎雜報

- 報 十數件 輪野濤生

投書規則

- 一、用紙ハ中折紙ヲ用ヒ十六行廿四字詰トシ字休ハ階書タルヘシ
 - 一、誌上匿名ヲ望マル、モ原稿ニハ必ス住所姓名ヲ詳記セララルヘシ
 - 一、言ノ政治ニ及ビ或ハ德義ニ背クモノハ一切謝絶ス未完ノ原稿ハ採リセズ(端書半紙洋紙ニ認メタルモノ又ハ字休亂雜ナルモノハ沒書トス)
 - 一、原稿採否ノ權ハ編輯係ニ在リ
 - 一、原稿返戻ノ請求ニ應セス(郵稅先拂又ハ不足ノモノハ受納セス)
- 以上

誄 辭

明治三十年一月十一日 英照皇太后青山御所ニ崩御シ給フ越テ
二月八日大葬ヲ舉ケサセラル諸親王諸王及ヒ文武百官墨衰徒步

靈柩ニ扈從シ京都月輪山ニ藏メ奉ル嗚呼哀哉伏テ惟ミレハ

英照皇后ハ 先帝ノ臨御ニ方リ位ヲ蘭殿ニ正ウシ體ヲ玉宸ニ齎
ウシ給フ當時國歩艱難内憂外患荐リニ臻ル 先帝宵衣旰食宏圖
英略以テ裕ヲ後昆ニ垂レ給フ其屯難ノ間機密ヲ贊シ壺政克ク諧
ラキ内助懿德ノ多カラセ給フコトハ中外ノ瞻仰シ奉ル所ナリ

今上陛下登極以降明治中興ノ大業ヲ恢弘シ 先帝ノ基緒ヲ宣揚
シ宇内萬方ニ烜赫セシメ給其毓德輔導ノ力蓋シ預テ多カラセ給

フ所ナラン青山御所ニ垂簾シ給フニ及ヒテハ躬桑蠶ヲ勸メ儉德
彌隆ク心ヲ民瘼ニ悉クサセ給ヒ災アレハ則之ヲ賑ハシ疫アレハ
則之ニ施シ給ヒ仁慈黎庶ニ洽シ實ニ萬世母儀ノ龜鑑ト稱シ奉ル
ヘシ舉世皆壽耆福祉ノ無彊ヲ祈リ奉リシニ一朝忽焉トシテ登遐
シ給フ嗚呼哀哉 大葬ヲ舉ケサセラル、ニ方リ億兆ノ臣民

靈柩ヲ奉送スル者ト奉送セサル者ト無ク嗚咽涙ヲ灑キ桂月ノ光
ヲ失フコトヲ悼ミ玉輝ノ復ヒ仰ク能サルコトヲ悲ム爰ニ本校職
員學生恭シク齊場ニ列シ至誠以テ遙拜ノ式ヲ舉ケ仰テ西南ノ天
ヲ望ミ謹テ誄ヲ陳シ奉ル第四高等學校長正六位勳六等臣大嶋誠

治誠恐誠懼

尿ハ透明水様帶黃色(前注射器内ノ者ト同シ)ニシテ酸性反應ヲ呈シ比重一〇一〇糖分非常ニ多量
 恩師常ニ戒ム「カテーテリスムス」ハ Vorbereitungノ主ト成書皆教ユ膀胱充滿ハ卵巢囊腫ト誤
 診スト

余茲ニ敢テ此過夫ヲ記シ以テ他日ノ戒トナス

抄 録

○實扶的里血清ノ中毒實例

衛生顧問 Dr. Krenemann 氏ハ「ベーりんぐ」血清ノ
 中毒症狀ヲ發セル場合ヲ自ラ實驗セシコトヲ報
 告セリ。其要ヲ摘記スルニ、氏ハ田舎旅行ノ際一
 患者ニ豫防注射ノ目的ヲ以テ、同血清ノ $\frac{1}{2}$ ヲ
 注射シ、更ニ該瓶殘余ノ六分ヲ取り、自己ノ左前
 膊背側ノ中央部ヲ撰デ之レヲ注射セシニ、通常、
 血清注射後ニ見ル可キ小膨隆ニ代フルニ、少ク
 トモ長一〇、仙迷巾五仙迷ニ亘ル廣大ナル腫瘍
 ヲ發生セリ。三十分ヲ經テ頭皮ニ強烈ノ癢痒ヲ
 發シ背部ニ波及シ、茲ニ痒痛ノ感ヲ覺ヘタリ。更
 ニ半時ヲ經テ其家ニ歸ヘリシニ煩悶、眩暈、耳内
 騷鳴、眩暈、強度ノ衰弱ヲ感シ辛フシテ其寢臺ニ
 上ルヲ得シ程ナリキ、此際体温ヲ計測スルニ、三
 十九度ニ昇リ、前膊ノ腫起猶存シ、手指ヲ開伸シ
 得ザル特異ノ麻痺狀態ヲ呈セリ。一二時間ノ後
 強度ノ煩渴ト共ニ、足ヲ除キタル他ノ全身ニ劇
 甚ナル癢痒及痒痛ヲ感スルト同時ニ、密ニ水胞
 性發疹ヲ簇生シ、皮膚乾燥、脈膊不感、抑壓感覺、
 下腹充滿苦悶ノ感ヲ覺エ、其日ノ晝餐ニ食セシ
 食物ノ未ダ消化セザルモノヲ吐出シ且ツ通常ノ
 粥狀糞少許ヲ排出セリ。斯クテ數時間ニシテ強

度ノ發汗ヲ來タシ、夜ニ至リテ發疹減退シ、安靜ニ睡眠セリ、翌朝体温猶三十九度ニ止リ正午ニ至テ始メテ無熱トナレリ。注射後二十四時間ニシテ第一回ノ尿利アリ、暗褐黃色ニシテ蛋白質ナリシモ次テ全く快癒セリ。著者ハ已ニ早クヨリ幾多ノ豫防注射ヲ施シタリ、其ガ經驗上ヨリ斷論シテ曰ク此通常便ニ於ケル下腹ノ腫脹ハ、全ク腸粘膜炎ニ於テ水胞性發疹ニ匹適スベキ濕潤及肥厚ヲ呈スルト、且多量ノ飲料ヲ用ユルニモ拘ハラズ尿排泄ノ減退スルトニヨリ、以テ外皮腸壁及他ノ身体部分ニ水分ノ蓄積ヲ將來スルニ基クモノナリト。

(Therap. Monatshefte, 1896 No. 6.)

譯者曰ク近來米國ノ醫士ハ「ベールンぐ」血清注射ニヨリテ、數多ノ石炭酸中毒症狀ヲ目撃セルヲ報セリ。之レ該血清内ニハ、永ク貯藏

ノ便ヲ得ンガ爲メニ、〇、五%ノ比ニ石炭酸ヲ包含セシメタルモノナレバナリ、今一瓶ノ全容量ヲ三〇、gr. トスレバ實ニ石炭酸ノ現存的包含量〇、一五ニ達ス、輒近血清製造ノ技術漸ク其歩ヲ進メ、可及的少量ノ血清中ニ可及的少量ノ免疫單位ヲ含マシメンコヲ企畫シ、現ニ我傳染病研究所ノ製造ニ係ルモノハ、八一〇、〇ニテ已ニ同數ノ單位ヲ含有セリ、サレド此一〇、〇ニ於テスラ尙石炭酸〇、〇五ヲ含ム、之レニヨリテ見レバ生後僅ニ數月ヲ經タル嬰兒ニ注射スルハ少ク顧慮スベキコナラシカ、(血清自己ノ價值ハ措テ論セズ)殊ニ注射ニ在テハ殆ンド其全量ヲ吸収シテ身体ニ影響スルコト、内服ノ比ニ非ザルヲ見レバナリ、之ニ因テカ佛國ノ「ル」Rouxハ、石炭酸中毒ヲ免レシメント欲シ、之レニ代フルニかんふるヲ以テセシモ、かんふるノ大ク身体ニ影響ヲ

及サマル程度ノ含量ニテハ、防腐力微弱ニシテ亦タ其目的ヲ達セスト云フ。又「ペーりん

タルモノ及僅ニ重症ニ傾ケルモノニ適ス
○貧血及萎黃病ニ脾臟越幾斯ノ應用

ぐ」血清ノ用法ニ從ヘバ「凡テ通常ノ防腐法ニ依リ」ト記シ、敢テ注射ノ前後ニ石炭酸ヲ以テ防腐スルヲ忌マズ、且血清内所含ノ石炭酸ハ毫モ血清ノ効力ニ障害ヲ與フルモノニ非ズトナセリ、然レモ他ノ論者ニ從ハ、若シ石炭酸ヲ防腐劑トノ使用セバ、注射器及皮膚ノ如キ更ニ「アルコホール」ヲ以テ能ク清拭スルヲ可トスト唱フ。或ハ小兒ハ實際其極量ノ二十倍乃至三十倍ニ堪ユ(ねいれんぶるひ)ニキコヲ云フ其論斷ノ歸着果シテ奈邊ニ在ルカハ知ルニ苦ム所ナレモ、這般ノ事柄ハ須ラツ實地治療家ノ綿密ナル注意ヲ要スルモノナラン
因ニ曰フ「ペーりんぐ」ノ血清No. 五ハ白色ノ貼紙ヲ有シ其免疫單位 Immunisingseinheiten (I.E.)ハ一〇〇〇ニシテ發病後二―三日ヲ經

伯林ノドクトル「コーんすたいん」氏ハ貧血及萎黃病ニ Miltzextrakt ヲ用キタル二十二ノ場合ヲ報告セリ。即其三分ノ二以上ハ此治療ニヨリテ佳良ノ成績を得タリ、先ツ自覺的障礙タル衰憊、便秘、頭痛心季瓦進、月經困難、食慾減損等快癒ニ就キ、正シク食氣亢進月經異常ノ消失ヲ見ルニ至レリ。猶他覺的ニハ外觀上著キ輕快及其多數ニ在テハ赤血球ノ數及血色素ノ含量ニ影響ヲ來タシ途ニ体重ノ増加ヲ呈セリ。而シテ該越幾斯ノ使用上何等ノ欠點ヲモ發見スルコトナカリキ。此越幾斯ハ褐色ニシテ芳香臭ヲ有シ、馨シキ味ヲ帶ベル肉越幾斯ノ種類ニシテ、之レニ肉羹汁又ハ甘味ヲ加ヘクルモノナリ。用法ハ越幾斯ノ一食匕ニ一碗ノ水ヲ加ヘテ煮ルベシ、然ルキハ可味ナル羹トナル用量ハ一回一―二茶匕、一日數

同トス、該品ハ Eurythroi ナル名ヲ以テ「ぐりゆーなう」ノ化學品製造場ヨリ販賣セラル

(Allgemeine medic. Central-ztg 1896

No. 43)

○疼痛點ノ壓迫ヲ以テ坐骨神經痛ヲ

治療シタル成績

Dr. Negro 氏ハ百十三人ノ坐骨神經痛患者ニ其疼

痛點ヲ壓迫シ百十人ヲ全治セシメタリ。其方法

ニヨレバ、患者ヲシテ地平ニ腹臥位ヲ執ラシメ、

其兩脚ヲ開キテ外輪セシム、此位置ニ在テ甚々

容易ニ坐骨切痕ヲ觸知ス、仍テ神經幹ヲ搜索シ、

確カニ其疼痛點ヲ發見スルヲ得ベシ、今術者ハ

右手ノ拇指ヲ以テ神經幹ヲ壓シ、更ニ左拇指ヲ

其上ニ加ヘ可及的強力ヲ以テ、凡ソ十五—二十

分間壓迫シ同時ニ僅カニ指ヲ移動シテ多少ノ側

方運動ヲ營ム——但シ指ノ神經幹ヨリ滑脱セザ

ルヲ要ス——終テ一—二分ヲ經バ、更ニ同法ヲ

以テ前回ヨリハ稍其力ヲ増加シテ之レヲ壓ス。

然ルキハ此二回ノ壓迫ノ後、患者ハ通常甚タシ

キ困難ナク歩行ヲ爲スヲ得、只壓迫後一—二時

間ヨリ二十四時間マデハ多少ノ疼痛ヲ留ムルノ

ミ。此法ハ凡ソ二日ニ一回ヲ施シ、多クハ十回ニ

テ全治スベシ (Sem. medic 1896 No. 2. —

Correspondenzblatt fuer Schwieger

Aerzte 1896 No. 8.)

○腦梅毒ノ治療法ニ就テ

Dr. M. Horowitz 氏ハ梅毒ノ早期發疹等ニハ水銀

塗擦能ク反應ヲ呈スト雖、腦梅毒ニ在リテハ、塗

擦療法及ヒ沃度加里内服ノ効ナカリシコトヲ論

セリ。彼ハ精密ナル試驗ヲ行ヘ水銀塗擦ニ於テ

Hgハ全然吸收セラレズ、從テ尿中ニモ之レヲ發

見スルコトナキヲ知レリ。仍テ直ニ鼻表皮下注射

療法ヲ始メタリシニ、口内炎ヲ發シ、尿中ニ亦Hg

ヲ認メ且速ニ腦症消退セリ。此場合ニ於テ、假

シ脳障害ニヨリテ皮膚ノ吸収能力ニ影響シ、若

Wochenschrift, 1896, No. 27.)

シクハ他ノ要因之レニ隨伴セシトハイヘ素トヨ

○歇斯的里性喉頭運動障害ニ就テ

リ之レ等ノ件ハ提出ス可キモノニ非ズ、何トナ

M, Grossmann 氏ハ説ヲ爲シテ曰ク、此運動障害

レハ常ニ毎回、塗擦療法奏効ナキ場合ニ際シ、試

タル全ク固有ノ状態ヲ呈スルモノニシテ之レチ

ミニ皮下注射療法ヲ以テスルニ、効驗立コロニ

ニ大群族ニ分ツ、一ハ上喉頭神經ノ領域ニ於テ

顯ハレ、且迅速ナル作用ヲ望ムヲ得タレバナリ

シ、他ハ下喉頭神經ノ配下ニ於テス、而シテ乙チ

ト○ (Centralblatt fuer ges Therapie

以テ最モ屢來ルモノトス○患者ハ聲音全ク嘔嘶

1896 No. 1.)

スレト、然カモ理解スベク談話ヲナシ得ベシ○此

○下劑トシテノ「いひちねーる」

場合ニ在テ、聲門ハ廣ク開放シ聲帶及其周圍ハ

Dr. M. Guensburger 氏ハ婦人生殖器ノ種々ナル炎症

全ク通常ニ、各吸氣ニ際シ左右ノ聲帶相互ヨリ

的疾患ニシテ便秘及消化不良ヲ兼發スルモノ五

離開シ、發音時ニハ聲門常ニ長卵圓形ノ一破裂

十人ニ試シニ皆適度ノ便通ヲ得且同時ニ食氣亢

状態ヲナシテ靜止ス○之レ等ノ聲帶半痙痺ハ一

進シ下腹部ノ苦痛等輕快シ屢子宮疾患ノ快癒ヲ

二ノ固有ナル性ヲ有ス、則偶○然○ニ○症○狀○全○ク○消○失○

實驗セリ○(一日三回其一丸中ニハ○、一ヲ含マ

シ○亦○タ○再○ヒ○發○生○ス○ル○ニ○在○リ○今○彼○ノ○障○碍○ノ○迷○夢○ヲ

シメ一回六丸ニ至ル) 著者ハ本品ヲ下劑ニ供シ

逸出シ得タル患者ガ不愉快ナル境遇若クハ其他

テ一ノ副作用ヲ見ズ且前述ノ如キ場合ニハ最モ

ノ精神感動ニ由リテ再ビ嘔嘶ヲ發スレト、極テ

稱揚スベキモノナリト報セリ○ (Therap.

嚴重ナル命令ノ下ニハ直ニ聲音ヲ發スルヲ見ル

ベシ。第一ノ固有黠トシテハ、此半痲痺タル決シテ全痲痺ニ進ムコトナク且一側ノミヲ侵襲スルコト無シ、若シ歇私的里患者ニ一側ノミノ半痲痺ヲ目撃セハ更ニ他ノ原因ニ就テ深ク考察セサルベカラズ。余ハ四十歳ノ一婦人ニシテ、十年以來聲音啞嚙及嚙下困難ヲ患ヘ、神經科醫ノ治療ヲ受ケ居ルモノヲ知レリ、其嚙下困難タル、凡テノ物皆嚙下シ得ルモ、只球狀塊ノ上下スルヲ感ズ、(Göbus hystericus) 患者ノ喉頭ヲ檢スルニ、左側ノ聲帶ハ全然其運動ヲ保有シ、右側ハ半痲痺ナリシ。本病ノ診斷上、喉頭痲痺ノ他ノ原因全ク欠除セル際ニハ、更ニ進テ歇私的里性半痲痺ノ破格ニ屬スル場合ヲ考慮セザルベカラズ。今他ノ方向ヨリ觀察スルニ、診斷實ニ疑ハシキコトナキニ非ズ、例バ長キ經過中ニハ、時トシテ不全痲痺ヨリ全痲痺ニ進ムコトアルガ如シ。或ハ痲痺性聲帶ガ赤色凹凸不平粗糙ヲ呈シ、食道消息子ノ挿

入ニヨリテ、食道癌腫ノ聲帶ニ蔓延セルモノナルコトヲ知リシコアリ。此運動障害中食道癌ニ基因スルモノハ、吸氣時ニ聲帶廣ク互ニ離開スルモ、發聲時ニハ極テ緊密ニ閉鎖スルヲ見ル、此聲帶ノ過動性 Hysteromotilinet ノミナラズ例規トシテ實際ノ嚙下困難ヲ有シ、全ク失音シテ只弱キ低聲ニテ呷クノミナリト。(Wiener medic. Doctoren, Collegium, 4 Novemb. 1895)

Wiener Klin, Rundschau 1895 No. 45)

譯者曰ク余ハ四十歳ノ男性歇私的里患者ニシテ平素全ク失音セサルモ、其嗜ム所ノ酒ニヨリ酩酊状態ニ至レバ、常ニ高聲ニ語ルモノヲ見シコアリ。

○歇私的里性失音ノ治療法

Seifert: Die Behandlung der hysterischen Aphonie
ト題シテ R. Kaysa 亦タ Zur Therapie der hysterischen Stimmlosigkeit 標シ共ニ喉頭按摩 Kehlkopfmassage ナ

以テ最モ稱揚スベキ治療法ナルヲ論セリ。其
法初メ先ツ、靜ニ手ヲ以テ外皮ノ上ヨリ喉頭部
ヲ撫擦スベシ、然ルキハ吸氣ニ由リテ容易ニ防
匿ヲ被ムル頸部ノ血液及淋巴ノ還流ハ、此撫擦
ノ爲ニ著ク其歸流ヲ幫助セラルベシ、斯クテ患
者ニ時々發音ヲ命シ、其發聲時ト共ニ、側方ヨリ
喉頭ヲ壓迫シ或ハ振動狀ニ移動ヲ試ミ、后ニハ
漸次歩ヲ進メテ形式的ノ談話練習ヲナサシムベ
シト云フニ在リ。 (Centralblatt fuer Klin.

medizin No 51.)

(以上七項 鈴木生抄譯)

○先天性葡萄膜炎ノ一例

Dr. Georg Spino氏ハ斯題ノ一例ヲ報告セリ之ニ尤
モ稀有ニシテ成書當タ一回ノ前例アルノ外カ千
八百八十五年「アンケー」氏其ノ三例ヲ記セルノ
ミ」本患者ハ二十歳ニシテ結膜病ヲ患ヒ來タリシ
者也一見右眼瞳孔不正ニ擴大シ大小ノ鋸齒狀瘡

着アルガ如キモ精檢スレバ瞳孔ハ圓ク虹彩下瞳
孔縁ハ暗褐色ノ小辨狀輪斑アリ著シク他虹彩部
ト限畫シ其ノ色及ビ外觀ハ虹彩ノ色素層ニ適ス
其ノ斑面ニ淺キ車輪狀ノ溝アリ瞳孔縁ニ於テ美
ナル小齒ヲ生ズ且ツ其ノ面ハ虹彩面ヨリ高ク瞳
孔中等度ニ散大スレバ狹絲ニ變ズ左眼異常ナク
兩眼ノ官能常ノ如シ「アンケー」氏ノ報告セルハ
皆ナ兩眼ニ現ハレシヲ以テ先天性ヲ認セシモ本
例ニ依リ「アンケー」氏ノ說ハ從テ消滅セザル可
カラズ而シテ本患者ノ色澤異常ハ分娩后直チニ
兩親ニヨリテ發見セラレタリト云フヲ以テソノ
先天性ナルヲ知ルベシ、 (Centralblatt

fuer praktische Augenheilkunde, october 1896)

○固視野外ニ現ハル、複視ニ就テ

A. W. Allingノ論ニ曰ク一物体ノ像ノ一眼ノ網膜
黄斑ヲ離ル、際ヒ他眼猶ホ正シク固視スルキハ
健康眼ニ於テ固視野外ニ複視ヲ現ハスヘシ殊ニ

吾人ハ上方視ヲ營ミ視軸ヲ輻湊スル能ハザルヲ

ヲ指示シ得ヘシ (Wiener. Medic. Presse

1896 No. 20)

以テ上方視ハ之レガ發生ヲ輔ク則チ近ク上方ニ

在ル物体ヲ注視スルキハ眼ハ少シク開散シ側方

ニ交叉性復視ヲ生ズ故ニ Duane 氏ハ此ノ現象ヲ

○角膜及結膜ニ多發セル新生物ニ就テ

以テ上直筋麻痺ノ症狀トナスハ大ニ不可ナリト

Dr. Adam Szulstanskiハ本題ノ報告ヲナン曰ク角

(Archiv fuer Augenheilkunde. Bd XXXI)

膜及結膜ニ見ル各種ノ新生物特ニ色素性肉腫ハ

○血滴ヨリ糖尿病ヲ診斷スル法

最モ多ク結膜輪ニ基礎ヲ有シ三ツノ通性アリ則

Dr. Bremer 氏ハ顯微鏡ヲ要セズシテ只ダ化學的

チ(一)殆ント格外ナク年長ノ人ニ來リ(二)蔓延

ニ診斷スル法ヲ案ゼリ則チ指尖ヨリ刺出セル血

セル場合ニ於テモ角膜組織トノ連合緩ニシテ實

滴ヲ二ツノ硝子板ノ間ニ取り之レヲ乾燥セシメ

質欠損ナク剝離シ得ヘク(三)鞏膜ハ角膜ヨリ抗

テ温水ヲ盛レル亞鉛皿中ニアル硝子皿中ニ移シ

抵弱ク深ク侵襲セラル、ノ傾アリ結膜ハ大低連

四分間煮沸ス是レ「ヘモグロビン」ヲ紅血球中ニ

續蔓延チナス是ナリ然ルニ余ノ實驗セルハ他ノ

固定センガ爲メナリ斯クシテ後チ之レチ「エオ

方法ヲ以テ結膜ヲ犯セルモノニシテ如何ニ趣味

ジンノチール「ラウ」液中ニ入ル、キハ健康血

アルヤ下文之ヲ記セン

液ニ在テハ紫紅色ヲ呈スレモ糖尿病患者ノ血液ニ

R. I. 農夫一八九五年四月十六日來リ診ヲ乞フ

アリテハ青綠色ニ變ズ此ノ法ハ未ダ尿中ニ糖分

体格良營養足ル遺傳的負荷ナシ生來健全三健兒

ヲ現出セザル前ニ於テ既ニ其ノ將來ニ發スヘキ

ヲ保ツ殆ント一年以來右眼ニ暗黒腫瘤ヲ現ハセ

リ始メ粟粒大ナリシカ漸次増大シテ一二月中ニ
豌豆大トナリニ乃至三月以來速ニ成長ノ鎖險ヲ
障害シ殆ント不能ナリト之ヲ驗スルニ右眼ノ險
及險結膜ハ尋常ニシテ險裂外半部ヨリ榛質大ヲ
超ユル暗灰白乃至黒褐色ノ腫瘍突出シ表面滑澤
稍辨狀ヲナス之ニ觸ルレハ可ナリ硬實ニシテ結
膜輪ニ跨リ外半部ハ六乃至八密迷鞏膜ト固着シ
内半部ハ之ニ反シ角膜上ニ架シ瞳孔領ニ達ス其
下面一乃至二密迷容易ク「アンデー」ヲ挿入シ得
ヘキモ外半部ハ然ラズ全腫ハ基底ヨリ移動スル
能ハズ基底ハ常觀ナリ、診斷黒色素肉腫
四月十八日腫瘍ヲ切除シ電氣燒灼器ヲ以テ創面
ヲ燒灼セリ此手術ハ容易ナラズ則チ有鉤鑷子ヲ
以テ摘ミシ際已ニ其一片斷裂シテ異常ノ出血ヲ
來セシ爲メ全基ヨリ正ク切除スルコト困難ナリキ
燒灼セシハ膏ニ止血ノ目的ノミナラズ切除ノ不
全ニシテ遺殘アランヲ恐シカ爲ナリ數日ノ後結
痂脱落シ平滑癍痕ヲ現ハシ五月八日全治退院セ
リ然ルニ一八九六年六月二日再ヒ右眼ノ著キ増
大ヲ以テ來リ前年八月ノ終(術後四ヶ月)ニ右上
險ノ肥厚ヲ覺ヘ再來増大シ二ヶ月以來速ニ發育
セリト訴フ已ニ遠方ヨリ望ムモ右上險ノ外半部
胡桃大ノ腫瘤ニヨリテ眼球ヨリ壓開セラルヲ知
ル輕壓ヲ加フルモ二三長二三密迷巾ノ腫瘍アリ
テ滑轉シ其健皮トノ境界ハ眼瞼シ唯唇間部十二
密迷腫瘍ト癒着スルノ他皮膚容易ニ移動ス腫物
ト眼球面ハ正ニ前切除癍痕部ニ對應シ外貌始メ
ノ腫瘍ト一汎ナリ六日二日之ヲ摘除シ其上險ノ
三角形欠損ハ容易ニ縫着シテ第一期癒合ヲ得六
月十四日全治退院セリ
鏡檢上該腫ハ黒色素性小細胞肉腫ニシテ支柱終
締織貧シク血管形成盛ナリキ
抑モ第二腫瘤ハ如何ナル方法ニヨリテ發生セシ
ヤ研究スベキ疑問ナリ凡テ腫瘍ノ發生方法ニ三

種アリ(一)第一腫ト關係ナク單獨ニ *Selbstständig*
(二)第一腫ノ轉移 *Metastas* ニヨリテ(三)第一
腫ノ接種 *Überimpfung* ニヨリテ生ス余ノ「フア
ール」ハ其何レニ屬スルヤ

前腫ニ關係ナク單獨ニ發生セシ者トスルハ不可
ナリ何トナレハ險結膜ニ此腫ヲ特發スルコト甚
タ稀ナレハナリ之ニ反シテ第一腫ノ切除後暫時
ニシテ第二腫ヲ來セシノ事情ハ大ニ其間ノ關係
ヲ推測スルニ餘アリ而シテ該患者ハ下等社會ニシ
格別ノ障害ヲ伴ハサルヲ以テ自ラ之ニ意ヲ注キ
シ時ハ己ニ發育ノ可ナリ進歩セシ後ナルベシ故
ニ發育ノ始期ハ八日ノ終ナラデ尙以前ナリシナ
ラン且ツ前手術時出血ノ煩ニヨリテ不知ノ間上
險結膜ニ指傷ヲ與ヘ又腫瘍小片ノ遺殘セシナキ
ヤ否ヤ議スヘカラサレバナリ轉移ハ血管及淋巴
道ニ依リテ成ル者ニシテ血管ヨリスルハ血管組織
ヨリ發生セシ腫瘍ノ外甚タ稀ナリ而シテ只第一

腫ノ崩壞シテ血管道ニ侵入スル際ニ出來得ヘキ
ノミ故ニ該患者ノ病歷上「エンボリー」性轉移ノ
要約ヲ發見セヌ又淋巴道ヨリハ如何 *Teichman u.*
Waldayer 氏ノ解剖研索ニ從ヘハ眼球結膜持ニ結

膜輪ヨリ險結膜ニ轉移スルハ不能ノ件タリ之ニ
反シテ接種ニ由テ第二腫ヲ來スハ諸氏ノ研究及
數多ノ實例ニヨリテ確實ノ事トナレリ然レ皆癌
腫ノミノ報告ニシテ余カ「フアール」ノ如キ黒色肉
腫ノ接種的發生ノ觀察ナカリキ而シテ前述ノ如ク
手術ノ際結膜囊ニ腫瘍片ヲ遺殘シ移植質トナリ
シカ或ハ第二腫發生時期ヲ顧レハ術前已ニ第一
腫ト觸接セル險結膜ニ其萌芽ヲ受納シタリシナ
ランカ兎モ角接種的發生ニ歸納セサル可ラズ腫
瘍ト健部ノ境界ニ於テ原腫ト轉移腫ヲ區別スル
カ如ク余ハ又爰ニ第一腫ノ境界健部ト緊密ナル
連續ヲナシ漸次「ジフース」ニ移行スルニ關セス
第二腫ノ周圍限界ヲナシ其部ノ細胞壓排セラル

、ヲ見タリ云々

抄録者曰ク前號高安學士ノ報告ニ係ル黒色

素肉腫ハ大ニ趣味アル者ニシテ余モ親ク示

教ノ恩恵ニ浴シ今尙髣髴トシテ眼前ニアリ

近時 *Centralbl. f. Pr. k. Augenh. Octber 1896.*

ヲ閱スルニ上記ノ報告ニ接セリ敢テ不文ヲ

顧ミス爰ニ抄ス

○正規分娩ニ依的兒麻酔ノ應用

「ペーテルスブルグ」府ノ Dr. F. W. Bukomsky 氏

ノ經驗ニ由レハ依的兒ハ子宮収縮ノ疼痛ヲ減少

シ且ツ手術的分娩モ無痛ニ經過セシムルノミナ

ラズ分娩經過ヲ遅延スルコトナシ却テ尋常ヨリ

速カナリシモノニ回アリテ寧ロ依的兒ハ子宮収

縮力ヲ強盛ナラシメタルカ如シ且ツ呼吸器疾患

アル者ノ外ハ能ク此麻酔ニ堪へ後産期ノ經過亦

良ナリ又出血ナク復故作用速ナルカ如シ乳分泌

ニ變化ヲ來サス兒体ニ害ヲ與フルコトナシ故ニ吾

人ハ顧慮ナク此麻酔ヲ使用シ得ベク特ニ子宮口

ニ指ヲ通スベキ程開大セシ際(開口初期)施スヲ

良トス然ルトキハ其後ノ開大ハ無痛ニ經過シ得

ベシト (*Moratschift fuer Gyn. Marz.*

1896)

○子宮内膜炎ノ蒸氣療法

「ダンチツヨ」ノ Dr. J. Parnet 氏ハ内膜炎ニ蒸氣ヲ

賞用シテ曰ク余ハ Prof. Snejijet 氏カ婦人科實

地ニ於テ蒸氣ヲ止血劑トシテ試用セシ際之ヲ子

宮出血ノ一「フアール」ニ應用セリ患婦ハ齡四十

歳ニシテ八回ノ分娩ヲ經タリシカ一年前ノ終娩

以來化膿性内膜炎ヲ患ヒ四週前ヨリ障害ヲ來シ

夫ヨリ子宮出血ヲ發シ一二回二三日ノ閉止ヲ見

シコトアリシモ后ニハ膿性排泄物ニ混シテ現ハ

レ子宮周圍結締織ニハ變狀ナク子宮腔稍擴大ス

ルモ卵遺殘物ナカリキ依テ「ツワイフェル」氏ノ

蒸氣發生器ト護謄管ニテ連合スル「フリッチボー

「カテーテル」ノ媒介ニテ蒸氣ヲ一分半間流過セシニ出血直ニ閉止シテ再ヒ發現セス又始メ帶綠黃色ノ粘稠ナル排泄物ハ次日ヨリ多量ノ水様黃色液ニ變シ二日ヲ經テ其量著ク減セリ此法ヲ八乃至十日ノ間歇ヲ以テ三回施行セシニ漸々排泄物常態トナリ諸障害輕快シテ全治ニ至レリ爾來同法ヲ經驗スルコト三十回ニシテ蒸氣ハ病の組織ヲ破壞スルコト化學的藥劑ヨリ確實ニ且ツ迅速ナルヲ認知セリ而シテ百度以下ノ蒸氣ニシテ流通短時ナラハ病の粘膜ノ表面ノミニ作用シ百二十度ニシテ流通稍長時(約一分半)ナラバ一定ノ深部迄完全ニ作用ス故ニ慢性滅毒性ノ者ニハ強力ノ者ヲ反覆セサルベカラザルモ輕度ノ者ハ屢一回ノ表在的腐蝕ニテ足レリ余ハ決シテ此法ノ有害作用ヲ認メサリキ且ツ一二回ノ演習后ハ全ク無痛のニ診察室ニテモ施行シ得ベク又助手ヲ要セサルナリ蒸氣裝置ハ醫師ノ右側

ノ小机上ニ置キ酒精燈ニ點火シ患者ハ背臥セシメ膈ヲ洗滌ノ飢狀子宮鏡ヲ挿入シ患者自身ニ把持セシム次テ適度ノ「カテーテル」ヲ子宮腔ニ送入シ左手ヲ以テ固定シ膈壁ニ抵觸セサルヲ務ム今ヤ所望ノ温度ヲ有スル蒸氣ヲ多量ニ發生セシメ右手ヲ以テ其護謨管ヲ取り嘴端ヲ「カテーテル」外口ニ挿入セハ「シウ」ナル音ヲ發シテ粘膜ニ作用シ卒然膈部粘膜ハ頸管外口ノ周圍ニ白色痂ヲ輪生スベシ次テ大約一茶匕ノ暗褐色ノ肉越幾斯様液頸管ヨリ點滴スルヲ見ン於爰酒燈ヲ滅シ「カテーテル」ヲ除去シ輕ク沃土切「マンボン」ヲ送入シ手術ヲ終ルト (Terap. Monathheft.)

1896, Nr. 1)

(以上三項 K O 生抄録)

雜 錄

○ 磷酸ノ容量的定量法ニ就テ 佐藤捨三郎
左の一篇は R. Segal 氏の原著に係るもの
にして Fresenius 氏分析化學雜誌より抄譯
したるものあり同法の學術上頗る趣味あ
るものと感したれば茲に掲載して以て讀
者ヲ紹介す

純粹なる溶液中に存する磷酸の容量的定量法は
晩近種々の標示藥を應用するにより異りたる各
種の方法を報告するに至れりと雖此際標示藥と
して刺倔謨斯を用ゆるの不可あるは已に往古よ
り稱へられし所あり

第二磷酸亞爾加里は兩性を反應するが故に
Bongartz 氏は第一磷酸亞爾加里を形成するの反
應に基き「メチオールオランヂ」標示藥として使用
すべきことと稱揚せり又之と同時に R. Thomson
氏は「フェノールフタレイン」によりて第二磷酸
亞爾加里を生成すべき反應と確定せりと雖ども

此方法は近來の （註） 氏の化學實驗場に於て試験
せられたるに同氏の若し炭酸の現存せざる場合
には最も精密ある成績を與ふべしものあることを
檢定せりと云ふ然して之を重量的定量法と其何
れが優れりやと比較するに「フェノールフタレ
イン」を用ゆるものにおいてハ試験の施行を甚
た簡單ならしむると以て大ニ賞揚するに足ると
雖ども之を以て綿密に一致する結果と得んとす
るの望む能はざる所なり
從來の實驗に徴するに「フェノールフタレイン」
の炭酸に對す最も鋭敏に働くと容量的定量法を
施行するの際炭酸を全く驅除するの困難なる等
の明ニ此方法を不綿密ならしむる重なる原因に
て世人の多く唱道する呀囁虫下幾と用る方法
の如きも亦満足なる成績を與へざるものあり
磷酸を直接容量的に定量せんとするに當り良好
なる標示藥の缺乏するに際し R. Maly 氏の間接

に之を定量する方法を案出せり此法の原理は係らず余は此際麻僞涅矢亞混液を用ひざるも已亞爾加里の過剰を加へたる后格魯兒稜僞謨の注加により燐酸を三燐酸稜僞謨として沈降せしめ然して其過剰の亞爾加里は次式ふより定規酸液を以て容量的に定量するに基因するものあり



又O. Glueckson氏乃實驗お係る方法の原理は過剰の安母尼亞を加へたる燐酸溶液を麻僞涅叟謨の現在に於て既に知れる如く燐酸安母紐謨麻僞涅叟謨として沈降せしめ然して其過剰の安母尼亞は定規酸液を以て容量的に定量するに基因するものにて即ち左の如し



F. Langer氏乃已明量の遊離安母尼亞を含有する

麻僞涅矢亞混液を以て此方法を實驗したりしに

係らず余は此際麻僞涅矢亞混液を用ひざるも已明量の稀薄安母尼亞を以て處置すれば精細なる結果を得へりと信す以下余が實驗に係る分折法を説かん

各種の容量的方法を施行するお當り先づ純粹なる稀薄燐酸の一定量を餾水を以て稀釋すべし此目的にて燐酸の二十立方「センチメートル」即ち二三、二〇二二「グラム」の重量を有するものに水を加へて一「リール」とおすと要す

A 重量分析

此溶液の二十五立方「センチメートル」の〇、五八「グラム」の H_3PO_4 に適應するものにして之しより〇、一八二三「グラム」の $\text{Mg}_2\text{P}_2\text{O}_7$ を得たり即ち純粹なる眞性燐酸の二七、七四「プロセント」お相當するものとす

B 容量分析

余の「メチールオランヂ」及「呀囉虫丁幾」を標示藥

として試験せしむ此際互に一致したる數并に重量分析に適したる數をも得ざりしを以て其成績を記載せず

「フェノールフタレイン」標示藥

稀簿燐酸の十立方「センチメートル」に其蓄薇紅色を呈するに至る迄〇、〇〇四七三の價格を有する那篤倫濃液を注加せしに

- (一)……………一〇、三^{cc}
- (二)……………一〇、四、
- (三)……………一〇、四、
- (四)……………一〇、四、

と消費したり今之を眞性燐酸に改算するときは二五、九七「プロセント」に適應するものなり

R. Maly の方法

余はMaly氏の方法に従ひ稀簿燐酸の十立方「センチメートル」よ〇、〇〇四七三の價格を有する那篤倫濃液三十立方「センチメートル」を加へ沸

騰に至る迄加熱し後之に一乃至二「センチメートル」乃格魯兒綏留濃液を注加し然して一二滴の「コラルリン」溶液 Corallinosung を加ふる後〇、〇〇三五一の價格と有する鹽酸を以て容量的に定量せしに

- (一)……………一六、九^{cc}
- (二)……………一六、八、
- (三)……………一六、八、
- (四)……………一六、八、

を消費したり即ち二六、八五「プロセント」の眞性燐酸に適應するものとす

其後R. Maly氏はDr. Bunneler氏と共に著述したる書に於て此方法を次の如く變更したり即ち析出たる三燐酸核留濃液を濾過し濾液中に存する過剰の亞爾加里を定量するによるものにして此法は前法に比すれり却て不正なる成績を與ふるものゝ如し之れ其原因の技術を施行するの際溶液

が氣中より炭酸を吸収し以て炭酸鹽を誘導せられたる亞爾加里の一部の次に規定規酸液に於ける容量的法を妨ぐるが故ならん

稀薄磷酸の五十立方「センチメートル」を〇、〇〇

四七三の價格を有する百五十立方「センチメ

トル」の那篤倫滷液と共に二分一「リッター」の

「メスコルフ」中に入れ沸騰に至るまで加熱し之

に過剰の格魯兒稜澁澁を加へて栓塞したる後放

冷しめ爾後沸騰水と以て其割度に至る迄稀釋し

振盪すべし爰に於て乾燥濾紙を用ひて能く乾き

たる器中へ濾過し該濾液の五十立方「センチメ

ール」に刺僣澁澁を注加する後其反應の終點を

認むるに至る迄〇、〇〇三五一の價格を有する

鹽酸を注加せしに

(一)……………六、七^{cc}

(二)……………六、八^{cc}

(三)……………六、八^{cc}

(四)……………六、八^{cc}
と消費したり即ち眞性磷酸の三一、六四「プロセント」に適應するものなり

C. Gruecksmann氏の方法

已に説述せし如く F. Langer 氏は C. Gruecksmann

氏によりて發表せられたる方法と已明量乃安母

尼亞を含有する麻僣澁澁を以て處置し能

く重量分析法に一致したる成績を得たりしが余

も亦同氏の方法を従ひ實驗せしに同く精密な

る一定數を檢出するを得たり

二十「グラム」の硫酸麻僣澁澁を二分一「リ

テル」の内容を有する「メスコルフ」中に於て百立

方「センチメートル」に澁水に溶解之に七十五

「グラム」の安母尼亞を加ふへし然るときは茲に

析出する水酸化麻僣澁澁により溶液は著しく

濁濁すると以て其溶液は透明となるに至るまで

多量に格魯兒安母澁澁を注加し(少くも十「グラ

ム」と要す) 餾水を以て其割合に達するまで稀釋するを要す余ハ此溶液の價格を定むるに其五立方「センチメートル」を用ひ已明の方法に従ひ定規酸液を以て安母尼亞を檢定せり

此方法を施行するハ先づ二十五立方「センチメートル」の稀薄磷酸を豫め已明の麻僞涅叟誤混液を含有する四分一「リール」の「コルフ」中に入れ其割合に至るまで水を以て稀釋し振盪するの後一時間放置すへし爾後緘留濾器を用ひて濾過し該濾液の二十五立方「センチメートル」を移酸を以て容量的又定量するものにして余ハ此際〇、〇〇六〇五の價格を有する磷酸

(一)……………一九、三⁰⁰

(二)……………一九、四^{〇〇}

(三)……………一九、四^{〇〇}

(四)……………一九、四^{〇〇}

と費したり之れ二七、六六「プロセント」の眞性

磷酸に適するものあり

磷酸の重量的定量法ハ格魯兒麻僞涅叟誤を應用するハ硫酸麻僞涅叟誤に於けるよりも優れりと雖も容量的定量法にありてハ寧ろ硫酸麻僞涅叟誤を賞用すべきものなり何となれば本品は市上ハ於て常に純品と得ると容易なれども之ハ反て格魯兒麻僞涅叟誤にありては往々中性反應を欠如するものありなり

十「グラム」の硫酸麻僞涅叟誤と水に溶解し之に「フェノールフタレイン」を加ふる後十分一定規那篤濁液を注加するとき無色の液變して赤紫色を呈すへし然れども此色の一二滴の定規酸液によりて忽ち消滅するものにして刺僞謨斯も亦之と同一の反應と有するものなり此法により分析と施行するには次の如くあるべし

稀薄磷酸の五十立方「センチメートル」に過剩の安母尼亞を加へ(〇、〇一五七の價格と有する安

母尼亞の四十立方「センチメートル」之に一乃至
 二立方「センチメートル」の濃厚なる硫酸麻侃涅
 斐護液を注加するの後全溶液を餾水を以て其割
 度に至るまで稀釋し強く振盪すへし爾後一時間
 を經過したる後乾燥絨褶濾器を用ひて乾きたる
 器中に濾過し該濾液の五十立方「センチメー
 ル」を別器に吸取え刺侃護斯と加ふる後〇、〇〇
 六〇五の價格の核酸を以て容量的に定量すへし
 余は此法に従ひ

(一)……………二八、三〇〇
 (二)……………二八、三〇〇
 (三)……………二八、二〇〇
 (四)……………二八、二〇〇
 (五)……………二八、二〇〇

同一の方法より従ひ得たるものにして只混液を烈
 し、振盪するの後直に濾過したるの差あるのみ
 なり
 此濾液の五十立方「センチメートル」ハ同價の核
 酸

(一)……………二八、一五〇
 (二)……………二八、一五〇
 (三)……………二八、二〇〇
 (四)……………二八、二〇〇
 (五)……………二八、三〇〇

を費したり今二八、二によりて計算するときは
 正に二七、五「プロセント」の眞性磷酸に適應す
 るものとす

を消費したり之れ二七、五「プロセント」の眞性
 磷酸に適應するものなり
 次に記載したる成績は第二回の試験に於て前と

以上記載せし試験の結果と要括すれば左の如し
 (一)、純粹なる磷酸の容量的方法中最も好成
 績を與ふるものはC. Giesekmann氏のものなり
 (二)、同氏の定量法は「メスコルフ」中の磷酸

が刺偏謨斯丁幾によりて固有に染色しふる後著

しき青色と呈するに至るまで己明量の安母尼亞

を加へ(最も適當あるは定規液とす)後之に同容

量の安母尼亞を注加するを以て總ての方法中最

も利益あるものあり然て此溶液中に存する過剰

の安母尼亞を檢知するには先づ濃厚ある硫酸麻

偏溼更謨溶液を加へ(過剰あるも害あり)其劃度

に至るまで稀釋し烈しく振盪するや否や直に濾

過し定規酸液を以て數回容量的に定量するにあ

り而して三分子の安母尼亞は一分子の眞性磷酸

に適應するが故に茲に得たる數を安母尼亞の總

量より減するときは即ち磷酸の量を得るものと

す

(三)、此方法は只安母尼亞の過剰を容量的お

定量するにありて麻偏溼更謨の過剰は決して

害を及ぼさざるが故に藥局及化學實驗場おあり

て純粹なる磷酸の定量に對しては最も稱揚する

に足るべきものと信す

○鈴木學士の書牘

前略 御參考迄に今回經歷せる道中記事の大意

を申上候 下略

道中の用意 之は可成單簡なるを良とす固より

道中用丈乃者を用意して可あり併し在來所持の

品物なれば携帶は勝手次第のとたるべし唯新調

の品物は出來得る丈儉約する方得策なるか如し

中には色々工夫過ぎて西洋にて間に合はざる者

を生する處あり生も始めは少も標準か付かず經

驗ある人に尋ぬるよ十人十色後に考ふきは隨分

放螺を云ふ人もあり心迷ふて定まらずと一やら

こ一やら出帆迄には荷物も出來上りたり併し實

際に當て見れい案外の事乃み多く俗に案するよ

りの産か易きと云ふは良く謂ふたる語なり(惡

口を云ふ人あり貴説も放螺か多きりねと)

衣服類 之の平生用ゐて居る洋服あれは夫を利

用すべし尤も時候ど土地の様子にて寒暖の差あれは印度海と通るには薄き衣類は必要あり小生自身は非常儉約にて縞の「セル」地裏みの者と縞「フラネル」の夏服の二組を新調せるまであり随分熱帯地方は白地の者必要なるべきも船中は油煤烟など多く直又汚き且つ歐地に來りては一も着用する場合多き故持ち合せなき以上は無用あり併し「アルパカ」或は薄羅紗の黒き服一組は必ず用意せば最早之にて充分なり上等船客などは食卓お就くときは必ず黒服を着するも中等なぞよては随分勝手次第あり然し小生は一枚は必要と感し候下等などにては「チヨッキ」にて食事する者あり」船中にて少し注意すべきは食事の際なり之れは各等級の船客皆一室にて食事するに故幾分か行儀良くして品格を保つ方可然と存候乍併「フロツクコート」にての餘り堅苦く候」洋服は當地は案外に高價(之に限らず何よても)なり夫故日本に仕立てたる物を携帶すべきは宜からん然し何れ當地お來らば日本仕立の儘にて役に立たす(立たぬことはあけれども)當地の仕立屋に一寸手を入れさせれば夫にて立派な者あり背廣う一番良し「モーニングコート」にては良し小生は元來御承知の如くカマワヌ性にて此等の用意も無く止むなく當地まで日本では「ヘル」と申す學生着用の品物にて背廣一組造り候(六十七「マルク」)又「フロツクコート」一組八十九「マルク」の散財をやらかし申候西洋人は皆洋服着用阿々

下着類 随分船中にて洗濯も頼めは出来るも下着は一番垢付者故少々用意すべし小生は平生所用の他に白の薄「フテネル」にて上下六枚宛を新調且つ白の堅き上「シャツ」八枚程を携帶せり伯林までの間に何れも二三枚位手と付けさるもの残りたり熱帯地方の汗を出す多く従ふて木綿

縮類の者は直に垢つき汗か付きての「ベタ、」とどかり臭氣を放て到底だめかり白「フラネル」ならば歐地に來りても下着として差支なきも縮類は用ゆる能はず

襟「カウス」類は少々用意すべし小生の「カウス」八枚襟二「ダース」を購ひたるも道中用なすば襟などは左様に澤山は入らず併し歐地に來りても毎日入用の品故残りてモ差支なし

船中尤も簡便に且つ心持ち良き着物の着用は薄フラネルの「シャツ」か半袖網「シャツ」の上へ學校制服様の立ち襟の服を着け別に襟も「カウス」も何もあきか一番なり熱き時苦しき時は禮式も何も云ふて居れず唯不体裁ならず行儀を亂さず垢染み汗臭きに非ざる以上は充分なり衣服の美醜善惡流行るを論するは馬鹿の骨頂と知るべし

靴傘杖類 靴は日本は安き故二三足は有りても

決して多きに非ず歐地の道路は「セメント」又石よて敷き詰めあり靴の損する甚し蝙蝠傘も絹張のもの一二本用意すべし當地などは絹物非常に高價にて絹物と云ば贅澤の沙汰あり「プロフエール」の傘などは皆毛縞子なり又男子は多く雨か降りても傘なしで歩き居れり杖の散歩の節は入用なり日本産竹杖か何か持て來れり妙からん靴下の「ダース」もあれり道中は充分なり又船中用上靴は一足用意すべし小生は今尙下宿に於て利用致居候

日本の浴衣の四五枚必用なり船中の寝衣とある又「フラネル」の單物二枚位の用意すべし之れり船中及歐地に於て寝衣とするに妙なり帯は決て忘る可らず白縮緬なれば大威張なり

胴巻の必用なり大切の物、旅費、旅行券等、固く臍に巻き付け置くべし又腹の冷を防ぐの効あり

手拭及手巾類 西洋風ならば船中旅屋下宿屋に
り皆我輩平生所用の者よりは上等の者備付けあ
り船中などにては毎日取變へたるか如く小生の
西洋手拭を五六枚用意せるも愧しくして出さず
多分日本迄無事歸朝するならん併し日本流のも
のは備付けあき故少し位持て來るも愛興あらん
か手巾は麻製の大なる者を買ふべし随分御饒別
に被下方あるも洋行の人にやる者の先方に行
て役に立つ様もものと送るべし貰ひたる人迷惑
す決して慾張り話に非す

帽子類 輕き烏打帽子の船中瀛車中ともに必要
なり又夏なれば麥藁帽子又は兜形のものも良し
然し兜形のは眞に熱帶地方旅行用めて歐地
には適せざるが如し麥藁ならば巴里伯林へ乗込
むを得べし又小生黒の山高帽子を大枚三圓出し
て東京よて求め芝の古道具にて買ひたる堅固な
る帽子入に納め大事にしていざ「マルセル」港

に着きたらば一番被ふて驚かさんと用意せるに
先づ佛國の知る人あきを以て謂ふても呉れす何
も分らずに通過したるが伯林に到りては其帽子
て御伴は御免ありと大笑ひよ笑はれ夫れは老人
の帽子なりと知人に云はれ下宿の御神さんに笑
はれ仕方なしに七「マルク」半を出して新調せり
之は小生が何でも西洋は高價と云ふ説と信し過
きたる結果にて一番得意と示したことは案外不
當りにて大閉口の一條あり目下伯林をぞにてい
軟き羅紗の矢狀縫合のところの當る部分か凹溝
となり居る者か山の低さが流行なり手廻り過ぎ
ての失策なり帽子は棚の隅ふあり何れ歸朝は節
かむるべし

毛布 は赤毛布白毛布のだめなり冬時紳士か御
手車の前に懸ける様なる少々上等の縞のもの乃な
れは落第する氣遣ふし道中時候の變化夜行瀛車
中をぞは欠く可らざる者なり革の毛布巻をも忘

る可らず

藤製の長さ寢椅子の船中尤も必要の者なり東京横濱多どりの澤山あり三四圓位なれども古物ならば一圓五拾錢位なり四十日間役も立ては充分なり上海香港などにも澤山あり且つ價も亦廉なり新物あて一圓五拾錢に同行者の一人は買ひたり船中毎日の仕事は三度の食事と甲板に出て此寢椅子の上にて日を送り食時を俟つより爲すとなし夫故尤も大切の品あり

化粧道具 と云へり大層色男然とするも其物は齒磨揚子、石鹼、鏡、櫛、剃刀、香水等あり剃刀は小生一番閉口せざるものにて洋行せんとする者の平素自分で鬚を剃る練習をなし置くべし心に思ひ當ると多かるべし残念ながら小生の鬚の剃れそ仕方なし專賣特許の安全剃刀と云ふ器械を携帶せり之にてもあきよりは勝れり(伯林の床屋の下手あると實に話にあらず小生の穀栗頭の當

時は虎の毛同様高低不同斑紋と呈し居候)

文房具、筆、墨、紙、狀袋等の云はずとも皆用意する者なり雪隠紙は西洋紙にて如何にも危険至極なり慣るれば或は良からん小生は五百枚程用意す如何も大便をするも一年半の大丈夫ならん下痢は此限に非ず

洗濯物を容るゝ袋 之は道中四十日間に出來たる洗濯物を容る爲めなり木綿或は「ツツク」にて随分手製にても出來る者なり一圓七十錢位

其他刷毛、襟飾、洋字名刺、空氣枕等旅行に必要なるの何なりと心付きたる者は遠慮なく持參あるべし小説類の可成面白きもの澤山持て來るべし船中は實に退屈なり學術用書籍も自家の藏書あきり可成持參すへし運賃は後條ある通り廉にして税關の無税なきはかり如何に歐地は書籍の澤山あきばとて決て「ロハ」ではくきす自分れもの持て來るの一番安直なり一寸聞くとさ

は原書と原地へ持ち來る様なれども算盤上にては決して然らず

土産物も入用なるべし絹物、古郵便切手、小銀貨、美人寫眞、錦畫等氣付きたるの持參あるへ

食物は道中用として小生は一切不用と存候隨

分場合も依て食ふ場所に困るとあり日本茶、味付海苔は普通携帶する品物あり小生は酒(正宗)

を大坂より六本程買入れ候り船中にては一向に誰も飲まず小生自らも餘り飲み度なく終ひ(コ

ロンボ)迄二本程残り弄換の節瓶は破きて酒を流し無念の涙を灑げ候夫故餘り食物などは携帶せざる方は却て都合宜しき様あり

荷作り以上手廻りの荷物は靴に入れざる可らず普通海外旅行用の「トランク」と稱する堅固な

る靴あり上等は三拾五六圓より七八圓位迄の相場なり又一回旅行に供したる「トランク」なれば

安心なり而して通常吾々書生的旅客は先づ「ト

ランク」の中等大なる者一個革製中等大の靴は小鞆位の手頃の者なり併し小生自家乃荷物の日

本製柳行李を「ツック」にて包み錠前を付けたる者一個小中鞆各一個帽子入一個にて至極輕便の

旅装にて參り候之きは衣類手廻道具れみを入れ

候なり其他七十幾れ本箱一個(書籍在中)ありたるれみ荷物れ數、重量等は旅行上非常の關係ある者其方法よりては随分馬鹿な錢と要するものなり小生自ら此點お付きては余程上手にや

りたる積なり何れ荷物の際は後條お申述ぶる積なり何者荷物には總て見安き目示を付くべし小生は(○)ど大書仕候其他自分の姓名往先きを記せ

る小札は數枚用意し何物にても自分所有のものおは皆付け置かされば紛失の恐あり長く注意す

へし「トランク」の大なるときは船の荷庫にて預

る用事ありて出し入れに行くときは一寸番人に

鼻藥をやるへし然し手頃れものなれば自分の寢

臺の下に入れ置くと出来萬事都合宜し

船 歐地に航するよは佛國船、獨乙船、英船あり

近來は我郵船會社も歐洲航海を開始せるを以て

旅客の意に委せ何にても宜し小生等一行の佛國

船にて參り候船賃は中等船客横濱より「マルセ

ル」港迄銀貨二百七拾六圓(之れ則ち割引の價格

なり)但し官吏の渡航は一割半程の割引きあり

下等の百七十圓程上等は四百圓程なりと云ふ船

賃の點佛國船少しく割高なれども船中の取扱食

事等は非常に良く其點より云ふときは割安なり

通常「マルセール」港迄達するに上海まで乗換

へ日本より四十二日を要す然し今回小生等は上

海及「コロンボ」の二港にて乗換し三十六日目に

佛國へ到着仕候

第一の船は「ヤラー」號と云ひ噸數四千二百五十

五噸馬力四千馬力随分美麗の船なり速力は十三

海里位なり此船にて横濱より上海まで行く此船

にても日本の土佐丸おは負けす且つ土佐丸は荷

船にて客船に非ず

第二の船は「サラジ」號と云ひ前者同形同噸數

の船なり此船にて上海より「コロンボ」まで行く

此船の「ボンベ」港へ寄港し「マルセル」港へ行

く者にて四十二日目あらでは「マルセル」港へ着

せず

第三の船は「アースリアン」號と云ひ六千六百七

噸七千馬力速力十六海里長さ百五十二迷六十四

巾十五迷〇八深さ十一迷二十五のものにて同船

は濠洲と佛國との間を來往するものにて印度洋

と航する船の中にては随分大なる者に御座候此

船は「ボンベ」より「スエス」港までは直航にて

速力も早し此が爲め六日早く「マルセール」港に

着したる筈なり少々乗換乃手數かゝりても早く

上陸するは得策なり

船中

船室は「ヤラー」號及び「サラジ」號にては一室に
船客四人を容るゝ都合なり實際は三人二人位一
か入れず候船室の様子に舷側に窓あり三重の戸
を備ふ左右に二段となり寢臺あり顔洗臺（二人
前）水桶あり嗽水あり手拭あり中々丁寧にて夜
は電氣燈と點し寢臺は毎朝小使來りて整理を各
寢臺の側に小なる戸棚あり内又は磁壺を藏す是
とは是迄日本洋行者の失策をなしたるものにて
或は柵と間違たるもあり内の磁壺中に金米糖
を入れ樂みたる人もある由又吐物入れと鑑定し
たる人あり實は小便壺なり西洋人は夜中は必ず
寢臺にて小便する習慣故に其備あるなり我等は
其失策は免れたり

船内日課 隨時起床午前八時迄は寢衣上靴の儘
我等は即ち日本浴衣の儘にて甲板を散歩し食堂
にて咖啡麵包を食す八時以後の服を着替へ靴を
穿つ西洋通は曰く八時後は甲板にある恰も陸上
外出するときと同様に心得へしと十時點鐘食卓
お就く之を朝飯なり五六品乃食物あり食時必ず
葡萄酒あり佛船は食時の際用ゆる酒は無代な
り（他船にては所用の酒類は皆拂はざる可らず）
一人二本位は飲める都合あり又麥酒を好めば之
を命するも可なり食時以外にありては錢を拂は
ざる可らず之は他船にはなき特點なり又毎食時
中は頭上に器械仕懸の大團扇様れ者あり「ブン
カー」と云ふ支那人之を動かし居るなり一時に
は肉汁、パンを出す六時夕食此時は「ソツア」な
ぞを供し終りに「アイスクリーム」など出て都合七
八品を出す九時には咖啡又は茶を出す佛船の其
食饌甚だ美にして中等などあては小生等の腹
には少々多きに過ぎ中々陸上生活まで非常に多
額と出すに非されば口に入らず宮中などの御馳
走は知らず普通には無き程に御馳走なり故に吾
は上陸し殊に獨乙に入りて食物のよすきに始め

て閉口せる程なり之は實に放螺に非ず論より証據試み給へ（殊に寄港地は多く熱帶地方故に果物には随分珍奇甘美のものあり）是にて船中主要の仕事は濟みたるなり餘事は甲板に出て或は歩行を試み小説を讀み雜誌と骨牌と弄し或は椅子上に横臥す又港に着く前には必ず郵便箱を出す此時は家信と認むる等の用事生す又毎日正午には船の位置及二十四時間に馳航せる里程を示す又船中に立派なる浴槽あり冷温交々流出す然れども海水なるを以て浴後淡水にて洗ふと要す實に中等船客の取扱にても吾々は一牛中一週間此贅澤の生活を持續するを得ざるへし彼様の次第故に船中へ食物など携帶するは一寸無用れ仕事なり

航海里程 横濟より神戸迄三百三十海里神戸より上海迄七百五十五海里上海より香港迄八百四十五海里香港より西貢迄九百四十八海里西貢が

「シンガポール」迄六百四十八海里「シンガポール」より「コロンボ」迄千五百七十海里「コロンボ」より「スエス」迄三千三百九十二海里「スエス」より「ホルトサイド」迄八十七海里「ホルトサイド」より「マルセル」迄千五百拾海里總計九千七拾一海里此航海日數大凡三十六日

荷物は可成少きを宜いとす船中にありては一切のもの皆船員か始末する故に多少を論せず唯堅固なる入物さへあれば夫にて事足る一旦上陸するときは實に面倒何事も人手を要すべく少くもても人を要せし皆金あり其他税關を經るの面倒あり之と思ふときは陸上の可成荷物の少きを要す而して又携帶の荷物は自ら區別し道中必要者ど否らざるものあり故に豫め其區別を立て荷造りするを要す故に小生は旅行中及到着當時必要のものは柳行李と二個の鞆中に収め書籍等は木箱中に入き尙内の「ブリツキ」にて張り水の入

らざる様にし充分堅固に釘付けとなし持參せり
而して此木箱は船の着港前に船の事務員に到着
地へ輸送と托すべし然るときは受取書を出す船
は航行中より直接輸送の荷物取扱の期に至れば
食堂に廣告す大抵四五日前なり又保険をも付す
るを得べし左様すれば瀛車に積込むと上陸の
際に持ち込むとかに要する非常の入費を省くを
得べし而して七十「キロ」乃木箱の小生伯林到着
後二週間を経て到着船中より伯林に到る迄の運
賃諸手數と伯林貨物停車場より小生居室へ入る
迄に十八「マルク」を要したり之を道中自ら携帶
したらんには少くも六十「マルク」位は取られた
るある可し而して小生携帶の手廻荷物は實に瀛
車中無賃なりし又室内より上下し瀛車に托する
等に至りても少量あるより要するところの賃金
も少なるは無論あるべし此事の道中尤も注意す
べき點と存候同行者は多く大なる「トランク」を
携帶し内お種々のものを入れざる爲め身側を離
す譯に行かず巴里より伯林迄三名の荷物にして
百二十「フラン」余を拂ひたり其他上下運搬には
之お對する金を要せるの必せり故に荷造りの必
要不必要品を區別して二種と一道中用のものは
二個位の荷物とし急速を要せざる分は釘付けの
箱とし船中より送り出すを最上とす餘り荷物の
數多きは監督に苦む又餘り一個にして大あるの
運搬に苦み且つ取扱上自然なげ出し破損の恐わ
り併し歐地の停車場に居る人足の強力お實に
驚き候殊に外國人の荷物の多く重大あるも夫れ
を一人にて平氣お運搬す之きは一寸日本人の目
に付く所あり
下略

Post ang 十月廿二

伯林客舎まで

十月十八日

鈴木文太郎

十全會各位御中

右の鈴木學士が吾十全會へ寄贈せられたるものなり學士は當時「ワルダイエル」氏に依りて「アルバイト」中の由、日あらずして學士の名「アルヒーフ」に赫くを見ん

○初見の辭

十全會已に成立し今や其會誌の第二號を發刊するに會す幸ふ會員諸君の熱心と奮勉とにより日に月に益々盛況に越かんとす而して生等誤て會長の推薦する所となり任を編輯員に受く我輩固と薄學短才加ふるゝ文藻に乏しく未だ斯道に輕驗と得ず何と以てか此重任ゝ當るを得んや然れども會長の命又辭すること能はず敢て鄙劣を省みず意を決して職を汚すことゝなりぬ是より出で、諸氏と紙上相見ゆるに至ふんとす若し夫れ諸君にして爾後予輩が愚昧を憐み幸に提携垂示の勞を惜まれずんば我輩又益々驚鈍を鼓し本會

の爲め尽瘁し以て諸君の厚顧に背かざらんことと勤めんとす

聊か鄙見を陳して初見の辭となすこと爾り

鐵腸 松原三郎

輪壽 久保捨藏

漫 録

さきのみかどの大きさまのみやの

神さりましゝといたみまつりて

青山の八重雲きぬて中々に

世の墨染の空とかりつゝ

番場友平

かすゐらぬしつのためどもわかほし乃

わかぬなけきにくちやはてまし 大西瀨治

◎杏林笑話

A. B. C. 生投

高飛車 某老醫伯官職聲望共に高し曾て一婦人を診して脹滿と做す弟子等其妊娠あるを知り之

れを先生不告ぐ先生威儀儼然勵聲して曰く「これだからそんな誤診とでも宜しい貴さま達は戒むべし」弟子等唯々として退く」

狼狽 一農婦あり頸を脱す其夫某醫の家に走つて來診を乞ふ先生恰も不在なり乃ち其代診生を請す生問ふて曰く「脱づしたのは下頸か上頸か」農夫倉皇答へて曰く「上頸です」代診生搔頭して曰く「下頸脱臼の整復術は此の間だ先生に教はつたが上頸のはまだ習はん」

兩盲視牆 老醫學士 ○先生曾て某縣立病院を長たり先生業に拙なりと雖獨り眼科は其短所にして眼底検査の如きは皆目行ふと能はず一日某軍醫氏を病院より訪ふ恰も眼科診察時に當る先生一患者を暗室に伴ひ檢眼鏡を執つて檢眼一番し軍醫に謂つて曰く「此の眼底には出血がありまます御覽なされませんか」軍醫も亦た檢眼して曰「なア一程大きき出血がありまますなア」

拙道辭 某先生職と某病院内科に奉ず、而かも

内科は其長所に非らず、患者腹痛を訴ふれば「バウヒシユメルツ」、頭痛を訴ふれば「コツプシユ

メルツ」、關節に疼痛ありと訴ふるときは必ず關節僂麻質斯との診斷をなすが御株の、先生なり、

一醫學生心臟瓣膜障害を患ひて先生の診を乞ふ先生診して慢性心内膜炎なる病名と下だす患者

問ふて曰く某先生は不肖の心疾病と僧帽瓣閉鎖不全ありとし某先生は三尖瓣閉鎖不全となせり

果して何れか是なると先生窘窮御茶と濁して曰く「まごとの辨膜ときめる程でありませせん先づ今の所では心内膜總体に悪いのです」

◎鍊腸漫錄

(其二) 學生の獨立心

鍊 腸

浦賀灣頭、號聲一發、高く九天に轟け、黒煙一蛇、遠く青空に漲るや。神州二千年來の長眠忽然として攪破せられき、實に古今未曾有の興奮劑た

り。之より蠢爾たる蠻習を脱し。一瀟千里、文明
れ風は靡然として都鄙お叫び、開化の光は燦然
として蒞屋に輝き、樵童にまばゆし」

滔々たる日本の學者なるもれ、口を開けば則ち
喋々學理を批評す、而のも是れ洋書の直譯もし
て、洋人の糟粕ならざるゝなく。陳腐淺膚聞くに
堪へず、枯燥澹泊驚くお堪へたり。嗚呼彼輩は徒
らに唯々諾々として、他人の臆説を罔信し、想像
に迷溺し。之を雲烟過視して、未だ苦心慘憺經營
彫琢、其の因て來る所を研究するの勇氣あふさ
るなり。所謂彼等は學術の仲買人なるものゝ。
宜ある哉、未だ斬新超拔驚天動地の大發明を
し、乾坤の微妙を發揮し、宇宙乃神機を抉出し、
一世を傾倒し、萬古を震撼し、以て世人をして驚
殺せしめたるものなき事や」

か熱血乃集注する所、燃情れ迸發する所をして、
毫も覆藏忌憚するなく吐露せしめよ。當今の學
生や、自勵的に學問と研究するにあらずして他
働的學問の爲め果た試験のため日夜驅役せら
るゝあり。故に稍もすれば、環顧遲疑因循姑息、
孜孜汲々教官の教授のみを齟齬し。之を墨守し
て漸く暗記するを得は、意氣揚々亦た他あるを
知らず。ひたすら試験の成績に拘泥し、隅々上席
を占ひれば、欣喜措く所を知らず。故に其の見聞
を狭く、學殖を淺く、自々豆天の小天地を碌々踞
踏たり。嗚呼此輩は只ご暗記に健なるものは點
を得る、徹夜に堪ゆるものゝ、人を制するを知ら
ざるか、且つや吾人天稟の才能は、汲めども尽き
ぬ渺茫たる蒼波の裡に沈み、模糊靨難たる煙霧
の中に埋まき、試験の如き淺薄なるものにより
て、暴露せらるゝものにあらず。短言すまば、學
校は終に絶對的にその才能を檢測する能はざる

師なく、從て特効藥頓挫藥あるものなし。唯だ可及的參考書を繕き、雜誌を讀み、而きて最と多く圖書室を訪ひ。以て自ら心を養ひ、獨立心を堅ふし、銳意奮進深慮密察、智識を啓發し、勇邁壯烈、覽略を練磨し、壯懷を高雲に馳せ、勇志と乾坤に負ひ、而して活字書れ譏を受くる勿き。只だ恨む我が醫學部あり、未だ完全ある圖書室なきを。遺恨万丈、暗涙千斛長へよ尽さじ」

驕傲自尊の評余敢て甘受せん、慢言放語の譏亦敢て辭せざるべし。請ふ去て鐵腸漫錄の本領を併讀せよ」

◎春を迎ふ

廣野霜林

春よ、汝の何れより來て何れ又在りや、本來無東西にして、春に姿無ければ是を認めず、汝は何れ此時に來て、何れの日去らんとするや、一味平等として、春に辭無ければ答をなさず、春よ、汝は何事をなさんとて來りしぞ、花を催す

業ならば、何とて空に知られぬ雪と成て、雨前風後亦空しく狼籍たるや、汝の何の爲めに來りしぞ、人を樂しましめんと欲せば、何とて三句早く過て庭内庭外に漫りに寂寥たるや、

春よ、汝の姿の花か柳か、實相乃紅るも、眞如の綠りも、色即ち空なりと想へば空あり、汝の辭は風か雨か、般若の聲も、波羅密の響きも、有にして無なりと謂はゞ無なり、汝の生涯は散て又た開く、三千世界の不増不減か、汝の能事は往て亦た來る、十二因縁の不生不滅か、我れ幸に一休の悟りを得されば、忌々しき骸骨を捧げて御用心を叫ぶ世話は無けれど、雜蕪に、年酒に、食氣を離れず、松に竹に色氣も捨らず、相變らずの鸚鵡返しとれ目出度の萬口一致に、テモ面倒なる春てふ物やと、終日春と探て春を得ず、飯來試に梅花を捻て嗅ば、春は指頭に在て已に芬々たり、夫はあんまり近まさり、遠きと花の香とすれ

ば、耳よして放吟の早鶯は溪聲に廣長舌を弄し、
眼おきて一帯の初霞の山色に清淨身を現す、遠
きも近きも心外に法無し、アナ面白の人の營み、
年々歳々人か春か、離れて離れず是心是佛、アナ
尊き春の眺め、歳々年々春か人か、之を無なりと
白眼なるは、去りとしてキツイ悟りの誤まり、空と
色とも冷笑するは、テモ迷ひの深きに非ずや、何
をくよくく柳は緑り、天地を打破して花は紅る、
中に一本國旗を建て、ソレ／＼春は軒よもちら
つく、指と軒とに悟らす迷はず、不來の春は即ち
不去あり、古往今來ヘンつがもねへ、るんぼう目
出度たれ春からずや、

◎消閑漫語

輪 濤 生

○春 信

盡日尋春不見春、芒鞋踏遍隴頭雲、歸來笑撚梅
花嗅、春在枝頭已十分、とは是を二月初春の光
景を咏するものならずや春色未だ野外に動かさ

と雖ども春信已に庭梅にあり南枝北枝斑々雪に
和して咲を含むところ乃ち群芳に魁けて春と報
するの風情あり毛唐人句あり、今年吾似去年我、
恐被梅花笑此身、と語を寄す天下の青衿諸士奮
勵一番歲月の新なると共に學術を進め思想を高
め人物と上げ以て春來馥郁たる清香を放て人お
賞でらるゝ梅花の爲めに笑はるゝ勿れ。

○東風無情

明治三十年をモ如何なる歳予嚮には
皇太后陛下の御崩御あり哀悼悲痛血涙未だ乾ら
ざるお當り今又神博士の訃報に接す我輩豈に國
家の爲め痛惜せざるを得んや博士固と舊幕旗下
の士官政四年と以て下谷の邸に生る明治十三年
七月大學醫學部を卒へて學士號を得同十五年二
月官命を以て獨乙國に留學す刻苦精勵居ること
五年にして歸へり爾來帝國大學教授に任せらる
實に本邦精神病家の大斗たり客年十一月門下の

諸氏博士を招じて在職十年の祝筵を開けりと吾
曹未だ君の聲咳の下親しく惠澤の益を受けしこ
どなしと雖ども而も我醫學界に於ける君の効驗
や甚だ大なるを知る誰か知らん天公俄然此君子
人お災せんとは嗟呼痛哭々々涙將よ盡きなんと
す

○失意と厭世

失意、失意渠多くは社會の虐待を受く其極遂お
絶望となり一轉して厭世となる今や厭世の悲境
に沈むるもの滔々皆然り是に於て乎彼等の叫び
て曰く噫厭世主義なるか吾が事遂に遂れりと
吾人之を聞いて大に惑ふ厭世吾れ之を知らず人

間萬事寒翁が馬敢て絶つべく厭ふべきおあらざ
るなり唯だ夫れ此哀々たる厭世の悼歌が艾老者
にわらずして有爲飛動春秋猶壯あるの笄冠者流
の口より發するに至りては我其の故を知らざる
なり

○吾人心事

天に向つて唾きするもれば天を汚す能はずして
却て已れの面を汚す彼無根れ事實と捏造し讒誣
誹毀を逞ふして自ら快となす輩は又何ぞ彼天に
向つて唾するの徒と異ならむ吾人の心事は天蒼
々地陽々笑倒す唾天の卑劣

明治三十年一月十一日、俄然愁雲漠として漲り、悲風悽として叫ぶ。英照皇太后陛下、忽焉として登遐し給ふ。嗟呼悲哉。何ぞ彼の蒼乃不仁なるや。普天の下、擧げて悼傷慟哭、痛心擢思。樵唱絶ち、欸乃聞く能はず。日月爲に光薄くして、草木爲に色稠み。天綱地維鬼神泣き、禽鳥默す。乾坤慘憺、山川寥廓。途上逢ふものは黒布れ片々たるのみ、望むものは竿頭に垂るゝ黒旗のみ。茲に校長我が第四高等學校職員及學生を總代して、恭しく天機伺及 御機嫌伺の辭を捧呈す」

文部省の告示に従ひ。十二日より十六日に至る五日間學業を廢し。黒布を左腕に結び。制帽に纏ひ。靜肅謹慎、以て哀悼の意を表す。天日光と潜め、春光影と藏む、莫逆れ友街頭に見ゆるも、悲憂面に顯れ、腸斷ち、涙枯る」。

越て十八日より授業を始めたるも、固より國民喪の期中にあり。諸生相誡め、輕疎浮薄の行動ありんこと期す。扣所に至るも、喫煙上らず、笑聲起らず。教室に入るも、頭垂れ、手と拱す。

二月八日 大葬を京都へ擧げ、靈柩を月輪山に藏め奉る。依て本校へ當日午前第九時と期し遙拜の式を擧ぐ。此日鵝毛地を潔め、乾坤纖塵なし。齊戒沐浴、隊伍整肅、西南に向て祭場に立ち、職員其左側を列を正ふ。正面に白布を垂れ、兩側に玉串と樹て、以て祭壇となす。大島校長謹んで祭壇に立つや、一同最敬禮を行ふ。校長誄詞を捧讀す。巻頭掲ぐるもの即ち是なり。其の章句や咨嗟傷切、其の語調や惋惜痛哀、聞くに堪へず。口

際じ、語塞り、接目坐に生し、萬慮倏に沈む。嚴肅靜寥、七百學生の精靈今果して何處をや
 迫る。胸底熱血迸り、雙眼血泪漣洳たり。捧讀畢り、一同最敬禮を行ふ。次は校長再び祭
 壇に立て玉串を捧が奉り、一同又最敬禮を行ふ。此に於て式全く畢り、解散を命せらる。
 時將さに十時あらんとす。然れども誠悼追慕、踳踖逡巡、悵然去るに忍び難く、覺せず躊
 躇低徊するもの數歩、數分」

歲月荏苒、二月十日に至り、國民喪茲に期を終る。黒布は腕を解かれ、帽を脱す、而かも
 我輩胸中の悲痛は、解く能はず、除く能はず。天地を俯仰して、熱涙止む能はず。志摧け
 心傷み、永く筆と取るゝ禁へず。悪んぞ詞章と修むるを得んや。噫」

○第五回通常會 二月廿一日午後一時より第四 嘆せしむ

高等學校本館扣所にてにて、開催せらる。大島會 第三席金子教授 「上膊骨上髁突起のデモン
 長先づ今より開會すべきを述べ、次で
 トラチオン」に就て、其稀有ある實驗の紹介あ

第一席高山教授登壇 「クレオソート及グアヤ リ(詳細は次號に譲る)

コールに就て」なる演題の下に、熱心に、莊重に、 第四席木村教授 は「人体國の人民」ある演題を
 殆んど一時間半の長演説をなし(詳細は次號に 以て、いと面白く人体の造構及び生理に付て説
 譲る) 明あり(詳細は次號に譲る)

第二席渡 貞氏 は「怪しの臨床實驗」お就て、 第五席小川教授 「膀胱充満を卵巢嚢腫と誤ま
 一種奇警の辨を揮ひ、人をして或は笑しめ或は りし一例」に就て、縷々説て曰く世上自己の學藝

に誇り。技術を負ふ者頗る多し。しかも余は、自ら其過失をわけて。大方の示教を乞ふもの少なきを怪む。去年夏余け腹部に一大腫物を有する女子の一患者に遭遇せり。當時余は之を卵巣腫と診断して。直ちに適當なる處置を行へんと欲したるも該患者の尙肺結核。蜜尿病等の疾病を有し。到底手術に堪ふる能はずと思惟したるを以て。已を得ず其儘放置したり。后數日を経て再び之を診したるに、腫物の幾分か其位地形狀を變じ、且つ以前其高さ臍と全平面にありし者が、縮小して臍下三指横徑の部あがりしを認めたるも、卵巣腫に於て、時として斯の如き變象を見ることあるが故に、余は尙卵巣腫あるを疑ひざりき、然るに第三回の診察に於て、患者が其直前排尿せりと訴ひしにも係はらず、試に尙カテーテルを挿入して、排尿せしめたるに、何ぞ圖らひ尿を排泄する、殆んど二千立方仙迷。下腹部の腫瘍の全時に忽焉として消失せむとは。余は今余が誤謬の診察を掲げて。世の輕々診し去つて余と其轍を全ふせんとする者を戒むと、夫れより歐洲諸大家乃著明なる實例を引証し、演じ去り演じ來つて亦餘蘊なく、聽者をして麻姑の痒きを搔くが如き感あらしめき、右終いつて、大嶋會長閉會を告ぐ、時に后六時

○森口專次郎君逝く 會員醫科第三年生森口專次郎君は一月十五日、有爲の材を齎して、九泉の下に入る。君爲人沈毅寡黙、苟も人と合はず、自ら醫界將來の明星を以て任せり。然るに昨年以來、氣色頓に揚らず、姿容大に衰ふるものあり。學友或は其罹病に非ざるやを疑ひ、勸むるに自重を以てすれば、君輒ち之を斥けて曰く、男子志を立て、研鑽に従ふ。區々二醫の故を以て學業を廢するが如きや、我所志に非ずと、螢雪舊

の如し。客臘果して痛を得、金澤病院に入院しを命せらまたり。

て、山崎高橋兩醫學士乃、懇篤なる治療の下に、
○學生掛の任命 今回新よ學生掛を、福見尙太郎、日下庄太郎の兩助教に任命せらまたり。

攝養怠りなかりしが、天之に年と假さず、歸郷の途次宇野氣の客舎に於て、遂に瞑せり。享年二十四、悲夫。
○級長及幹生 今度學級整理の便を計り、學生心得の實行と督勵誘導せんが爲め、各學級又級

○幹事の交迭 醫科第三年級幹事石森國臣君都合により、其職を辭したるを以て、補缺撰擧を行生と統率し、行狀及勤惰を監査し、兼て教場内の秩序及清潔を保持するものにして。幹生の級長の指圖に依り、學生心得の實行を誘導するもの

○新入會員 前の本校助教授谷中正勝氏は、今回本會へ入會せられたり。氏は當時秋田縣米内澤病院長を奉職し、令聞嘖々たりと云ふ。
一學期間とせり、但し滿期後更に繼續することあるべいと云ふ。

○醫學部評議會 今回我が醫學部に評議會なるものを設けられ、學校長の諮問に應じ、重要な校務と評議することとなれり。而して高安主事、木村教授、櫻井教授、山崎教授該評議員を命せらるる諸君は左の如し

を、其の任期は二箇年なりと云ふ。

○舍監の任命 教授今井省三氏は今回本校舍監

醫學得業士

木村辰次郎(山口) 島村豊次郎(石川)

上野 貞吉(富山)

森岡市太郎(石川) 中隊、本多勝久、田上涉兩氏は全第十二中隊へ各

松森 佐一(福井)

野崎 三郎(石川)

一年志願兵として入隊せり。四氏皆現役を志願

加須屋武留(北海道)

吉田和三郎(兵庫)

一たりと云ふ。壯志知るべし

藥學得業士

鶴澤 豊吉(石川)

久保 喜平(石川)

嶋田吉三郎、竹中繁次郎、金子太須計の三氏は、
客臘上京、嶋田、金子兩氏は相伴ひて醫科大學病

○卒業生諸氏の方角

客秋、犀涯古今亭に、金鑰を叩いて、卒業生諸氏

理室へ入り、竹中氏は全生理室に入り。竹中氏
嘗て他に語つていふ。須叟大學に遊び、更は航し

を送つてより、烏兔々々己よ三閏月。寒風梢を拂

て海西に趣かんと。果して然るり、ア、果しく然

ひ、冷氣袂に滿つ。起て諸氏が舊寓を訪へば、柴

るり。亦一個の風雲兒。喜ぶべきあり。又金子氏

扉人なく、空室堅く鎖す。來者茫々去者亦茫々、

より當地の知友に贈りたる書簡の一節に曰く、

吾輩嘗て堂と企ふして、研鑽の業に従ひしもの。

余輩は充分獨語を學び居らざるがため、何處へ

回憶何ぞ窮まらむ。今諸氏が方向を追尋して、企

出ても頭上がらず、大は悔恨致居候、爾來上京せ

學諸氏に報ず、敢て無用の擧にあらざらん歎。

んと欲するものは、充分なる獨語の修養を要す

鈴木寛之助 東龜太郎 末岡外次郎の三氏は金澤

る儀と被存候と。好箇の鑑戒といふべし。

病院内科に入り、室田萬三太郎、東良平の二氏は

其他紺谷良作、氏は遠より上京の途お就る

全外科に入り。

べく、中嶋正泰氏は過日常地を過ぎて上京の途

園崎純次郎、森川脩兩氏は歩兵第七聯隊第十一

に上れり、林幸市郎氏は河北郡木越村の自宅に

ありて、修得の妙腕を揮ひ、四方患者の需めに應せり。近くは新紙にたける實扶的里血清療法

に聘せらるたりと聞く。々し、永井環氏は曩日三州幡豆郡なる田中病院

施行れ大々の廣告を以て見るも、氏が氣炎のわる所を知るに足る。廣野喜久雄氏は目下本市木の新保に潜ひて、自ら池中の蛟龍を以て任せる

卒業生諸氏の動靜概ね斯の如し。知らず校堂幾百の士、誰人の面影か、よく枕頭に捉は來つて、恰々として温故知新の益談をなす者ぞ。

も、二月下旬頃には、羽咋郡の某地小門戸を張る積りありと、さる人又語りたりと云へば、其雲漢に翱翔するの日の、遠くらずして目睹するを得べし。橘壽氏の郷里福井縣丹生郡安居村に於

○一年志願兵消息 小西寅次郎氏は近衛歩兵第二聯隊第八中隊に、安田順太郎氏は金澤歩兵第七聯隊第一中隊に、石田太吉氏は全第二中隊に、河間中泰三氏は大津歩兵第九聯隊第五中隊に、河

て、父君を助けて頻ふ起死回生の技を施し、近村の醫師殆ど顔色なしとは眞歟。月前の微星其光輝を失ふは抑も當然、しうも吾輩は夫の非命に斃るゝの徒をして、よく其天壽を全からしめん

本算悟及松坂治助の兩氏は、姫路歩兵第十聯隊第七中隊に、平井正澄及渡邊鐵の兩氏は、大坂歩兵第二十聯隊第九中隊に、各一年志願兵として、入營せられたり。

を希ふ而已。千田榮三男氏は痼疾甚だ痊ぬ、先頃止善堂病院に入りりと。此にして疾病は黒らざんば、亦こま有爲の一俊材、時尙餘寒叫蝟、乞ふ加餐せよ。尙堀直江氏は其郷地信州飯田に悠

○藥劑官任命 卒業生金田一春、澁谷十郎は、兼陸軍三等藥劑官、東京衛戍病院勤務に、澁谷十郎氏は陸軍三等藥劑官、名古屋衛戍病院勤務に任

命されたり

○甲午醫學會新年宴會 は去る一月九日正午より、本市里見町大野樓に於て、石川縣藥劑師會との合併にて催せしに、會するもの四十八名にして、頗る盛會ありしと云ふ」

○職員及學生の種痘 今や天然痘の、各府縣到處に流行して其の毒勢を擲にせざるいなし。

茲に於て、我校は小川、野田、岡部、村上教授及松本、森嶋助教授を種痘委員を命じ、醫科第四年生をして施術者たらしむ。二月十二、十三兩日、本校職員を始め、醫學部及大學豫科學生總計五百五六十名に種痘を施し。後ち十五、十六兩日にいたり、之を驗診せしむ、善感者百二三十名あり就中既に幼時天然痘を患へたるものにして、善感せるもの、職員中お一二名ありたる由。蓋し今回の種痘成績は、學術上の興味尠からず。依て野田教授は次號に於て、緻密精細の報告を寄稿せむ

る、由

○海軍少軍醫候補生の募集 今般海軍少軍醫候補生三十四名を募集し、且將來は毎年春秋二回に募集可相成見込に付き、醫學部卒業生并在校學生卒業の上右出願すへき様勸誘の義、海軍衛生會議長より、我が主事に宛て依頼ありたり、行よ壯心の男子、走き青雲の健兒、而して志願乃者は、明治二十六年十二月勅令第二百五十一號（海軍高等武官候補生規則）、同二十八年九月勅令第二百二十七號、同二十九年六月勅令第二百五十八號（共お海軍高等武官候補生規則中改正の件）及同二十九年三月海軍省令第二號（海軍少軍醫候補生採用試験規則）に依り、本年四月三十日まで海軍衛生會議より出願し、身體検査及學術検査は本年五月十一日より、海軍大學校内に於て開始すと云ふ、茲に參考の爲め検査科目と掲ぐ、尙は海軍少藥劑官候補生の検査科目をも擧ぐん

高等學校醫學部又は府縣立醫學校の卒業生おして、醫術開業免狀を有する者

一學說 解剖學 生理學 衛生學

藥物學 內科學 外科學

以科學

二實地 局所解剖 組織學 內科

外科

三外國語學 歐文和譯・和文歐譯

高等學校醫學部又は府縣立醫學校の卒業生にして、藥劑師免狀を有する者

一學說 化學 生藥學 製藥化學

裁判化學

二實地 分拆術 藥品鑑定 飲食物試驗

藥物製煉 調劑術

三外國語學 歐文和譯

● 會 告

本誌第三號投稿

締切ハ來四月廿

日限トス

